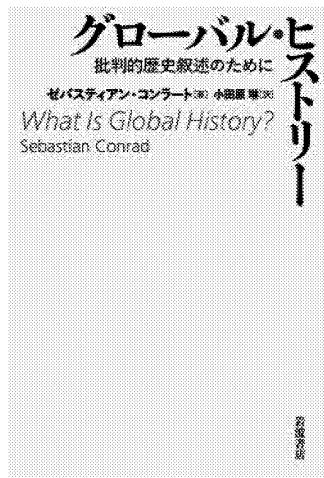


今や、専門書のみならず、教科書でもウェブでも至る所でグローバルヒストリーという言い回しに私たちには出合う。グローバルな歴史、つまり一国、一地域、一都市という単位ではなく、人・もの・金・情報などを通じて繋がついる空間を一つの世界として記述する歴史こそがグローバルヒストリーと言われている。

だとするならば本書はグローバリゼーションが席巻する今の世界にぴったりの歴史書じゃないか。これさえ読めば世界の歴史が一望できると貰を捲るかもしれない。しかし残念ながらその期待は裏切られる。本書には、著名人の経歴も世界を揺るがした大事件も、巨額のお金の流れも出てこない。というのも本書は、グローバルヒストリーという歴史の描き方とはいったい何であるのかを問うた問題提起の書だからである。

## グローバル・ヒストリー

ゼバスティアン・コンラート著



原題=WHAT IS GLOBAL HISTORY? (小田原琳訳、岩波書店・2900円)

▼著者は66年生まれ。独ベルリン自由大教授。専門はドイツ植民地主義史。

複眼思考を推奨するのは、複雑な世界の歴史を簡単にわかつたつもりになるべきではない、とのメッセージでもある。グローバリゼーションのもと日々変化する世界の中での仕事を進める読者にこそ、立ち止まりながら、そしていろいろな立場の人と議論しながら、味読してほしい一冊である。

『評』立教大学教授 小澤 実

それなら読まないという向きもあるだろう。しかし、だからこそ手にとって欲しい。昨今の世界においてグローバルヒストリーを書くという嘗みが、現在に向き合った歴史家がいかに考えた末にたどり着いた叙述方法であるのか。それが、これまで私たちが学んできただ歴史を題材としながら、どれほど深い省察を私たちに与えてくれ

るのか。そしてそれが、時としていかに人々を苦しめる凶器にもなりうるのか。

例えばイスラーム教の誕生を、コロンブスのアメリカ「発見」を、革命の理念を、近代日本の拡張過程を、中国の世界展開やBLM(ブラック・ライブズ・マター)運動といった事象を、ウォール街で日

々億単位の金を動かしている人、シリアのアレッポで爆撃に怯える人、アフリカの鉱山で精密機器の原材料を掘削する人、そして今この日本で生きる私たちなどのように捉えるのか。コンラートの本文に加えて、訳者小田原の解説は、歴史を我が事として捉えるように捉え見方を鍛えるグローバルヒストリーの可能性を提示する。

# 歴史を我が事とするために